

【研究論文】

教職実践演習における協同学習の効果②

—使命感や責任感、他者理解や学級経営に焦点を当てて—

横田 典子* 滝沢 ほだか* 山田 悠莉* 平尾 憲嗣* 米窪 洋介*

要 旨

平成 23 年度から実施されている教職実践演習（幼稚園）は、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられ、本学では集団の中でロールプレイを繰り返しながら協同学習を行う内容で実施している。

本研究では、学生の内省（アンケート）から、文部科学省「教職実践演習（仮称）について」に示されている、使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項、幼児児童理解や学級経営に関する事項について調査した結果、集団の中でロールプレイを繰り返すという協同学習によって、より実践を意識した活動が展開され、すべての事項で学びが深まっていったことが明らかとなった。また、発表計画の立案と付属幼稚園見学に関する授業改善についても、有効に働いていたことが示唆され、担当教員による適切な指導、毎時の振り返りの重要性、それらを支える担当教員間の連携の必要性も確認できた。

キーワード：教職実践演習、協同学習、ロールプレイ、使命感、責任感

I. はじめに

平成 23 年度から実施されている教職実践演習（幼稚園）は、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものであり、文部科学省中央教育審議会からの答申「教職実践演習（仮称）について」には、以下の 4 つが到達目標に含めることが必要な事項として示されている。

- ① 使命感や責任感、教育的愛情に関する事項
- ② 社会性や対人関係能力に関する事項
- ③ 幼児児童理解や学級経営に関する事項
- ④ 教科・保育内容等の指導能力に関する事項

これらを受けて、本学の教職実践演習は、この 4 つの事項を基に、授業のねらいを達成できるよう、内容を構成している。特徴としては、集団での学びを強く意識した内容であること、PDCA サイクルを意識した振り返りを毎授業後に行っていること、教育目標・保育目標、長期・短期指導計画、学級経営を基にした付属幼稚園での見学を実施していること、学級経営に基づいた発表計画を立案し、模擬保育とロールプレイを通して保育現場で必要となる力を実践的に学んでいくことが挙げられる。

平成 26 年度の研究では、「岡崎女子短期大学にお

ける教職実践演習（幼稚園）初年度実践報告—教職実践演習の実施に係る課題—」の中にあげられている第三の課題（グループやクラス単位での計画立案、実践等の改善、振り返り時間の確保）について、学生が何を学び、その力をどの場面で身につけているかについて把握するため、本授業の特徴でもある集団での学びに焦点を当て、協同学習の効果について研究を行った。そこでは、「集団での学び」を経て学生が得るべきであろう力を①保育現場で他者と協同して仕事ができる力、②学級集団を求めるとして、学生の内省（アンケート）から社会性や対人関係能力、他者理解の視点に着目し、集団の一員としての役割と学級経営の視点に対する深まりについて検討した。研究の結果を以下に示す。（以下引用）

「活動全体を通して、集団を意識した活動が展開されていること、また、学生が集団の中で様々な立場を経験し多角的な目を持ち、様々な立場で自らの役割を果たそうとする姿勢を持っていること、適宜振り返りを行うことでより集団での学びが深まること明らかとなった。」¹⁾

そこで本研究では、より広い視点から協同学習の意義や効果を図るため、昨年度の研究では焦点を当てていない使命感や責任感、学級経営に関する項目

* 岡崎女子短期大学

を加えて研究を行うこととする。

II. 授業の概要

平成 27 年度の教職実践演習は、授業計画を表 1 のように設定し、幼児教育学科第一部 4 クラス、第三部 2 クラスを教員 7 名で担当した。昨年度から改善を試みた点としては、毎時の振り返りを充実させるために、振り返りのシートを拡張したこと、付属幼稚園での見学をより具体的な現場のイメージに結びつけるために、見学前に作成する月の指導計画を見学時の 11 月に設定したことが挙げられる。

7 回目以降のクラス別活動の発表場所は、6 回目の企画内容によるコンペによって表 2 に示すように割り振られた。また、担当教員の話し合いにより共有した、7 回目～14 回目、幼児教育祭前日までの各場所の活動内容とクラス内での出来事（※）を表 3 に示す。

表 1：授業内容

回数	内容
1	オリエンテーション 教育課程・保育課程について
2	「学習の記録」記入 長期指導計画・短期指導計画について(月の指導計画作成)
3	付属幼稚園見学(学級経営を学ぶ)
4	付属幼稚園園長講話
5	幼児教育祭についての説明 学級経営に基づいた発表計画に向けての話し合い
6	クラスの発表企画案の発表(コンペ)を行う
7	発表内容に従った活動計画の全体像決定 クラス活動開始
8～13	各クラスのねらいに従ってロールプレイによって表現しながら、カウンセリングマインドについて学ぶ
14	幼児教育祭前日(付属幼稚園を招いてのリハーサル)
15・16	幼児教育祭 1 日目、2 日目
17	総括(振り返り)

表 2：クラス別発表場所

クラス	発表場所(発表形式)
2 A	大体育室(巨大迷路・アトラクション)
2 B	S Kホール(ホール劇)
2 C	ホワイエ(フロア劇)
2 D	S Kホール(ホール劇)
3 E	6 2 1 2 教室(教室劇)
3 G	大体育室(巨大迷路・アトラクション)

表 3：場所別活動内容

	SKホール	大体育室
7	・プロット提出	・テーマ決定 ・グループごとに内容を検討
8	・台本の修正と役割の確認 ・機材の説明会	・グループ間の内容調整 ※内容変更のグループ有
9	・台本決定	・配置案決定 ・グループごとに制作開始
10	・中間発表	・グループごとに制作
11	・通し練習開始 ※Bクラス、主役の配役変更	・グループごとに制作
12	・練習と制作	・全員で迷路用の壁制作
13	・練習と制作 ※Dクラス、課題が残るため指導	・グループごとの制作 ・迷路の壁面の組み立て
14	・リハーサル	・クラスごとに模擬保育
	ホワイエ	6212 教室
7	・リーダーを中心に台本制作	・台本を基に準備を進める ※欠席者が目立つ
8	・場面数と空間の使い方について 検討 ・台本の読み合わせ、内容の修正	・大道具、小道具の制作開始 ・劇の練習と台本の修正
9	・台本の読み合わせ、内容の修正	・練習と制作 ※台本に変更有
10	・台本の作り直し ※リーダーの変更 ※学生間で意見の食い違い有	・中間発表
11	・台本決定 ・中間発表	・練習と制作
12	・練習と制作	・練習と制作 ※内容の一部を変更
13	・練習と制作	・練習と制作 ※台本の修正
14	・リハーサル	・リハーサル

III. 調査方法

対象は、平成 27 年度本学幼児教育学科第一部 2 年生 179 名および第三部 3 年生 86 名、計 265 名である。

方法は、毎授業後に 10 項目の質問項目に対し 5 段階の自己評価で回答を求める。初回から総括までに実施した計 17 回の質問紙調査の結果を、1. 項目別に全体平均値を求め、全体的な学生の意識変化を分析して考察を加え、2. 各項目をクラス別に分析し、クラス活動が中心となる 7 回目以降は、担当教員の打ち合わせ記録も参照しながら考察する。設定した質問項目は、教職実践演習における到達目標及び目標到達の確認指標例を参考に表 4 のように作成した。

表 4：質問項目

使命感や責任感、教育的愛情に関する事項	項目 1	誠実、公平かつ責任感を持って他者に接し、他者から学び、共に成長しようとする意識を持って、活動に当たることができる。
	項目 2	保育者についての基本的な理解に基づき、自発的・積極的に自己の責任を果たそうとする姿勢を持つことができる。
	項目 3	自己の課題を認識し、その解決に向けて、自己研鑽に励むなど、常に学び続けようとする姿勢を持つことができる。
	項目 4	子どもの成長や安全、健康管理に常に配慮して、具体的な教育活動を組み立てることができる。
社会性や対人関係に関する事項	項目 5	他者の意見やアドバイスに耳を傾けるとともに、理解や協力を得ながら、自らの役割を果たすことができる。
	項目 6	集団の一員として、独りよがりにならず、協調性や柔軟性を持って活動にあたることができる。
	項目 7	先生や仲間の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携・協力しながら課題に対処することができる。
他者理解や学級経営に関する事項	項目 8	誰とも気軽に顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる。
	項目 9	他者からの指摘を真摯に受け止め、取り巻く状況を理解し、公平かつ受容的な態度で接することができる。
	項目 10	学級の状況を把握した上で経営案を作成し、それに基づく学級づくりをしようとする姿勢を持つことができる。

なお、質問項目の他者とは、担当教員、クラスの仲間や他クラスの学生、付属幼稚園児や幼児教育祭を訪れた子どもや保護者を指し、授業内容によって受け取り方が異なることが推測される。

IV. 結果と考察

1. 項目別、全体平均の推移

質問紙調査で得られたデータを項目別に全体平均の推移を調査した(図1～3)。調査の結果、以下の5点を主な特徴として考察を加える。

- i. 項目 4、10 で授業開始時の数値が著しく低い
- ii. 14～16 回目はすべての項目で大きく数値が上がっている
- iii. 3 回目は項目 5、7 以外で数値が上がっている
- iv. 5 回目は項目 3 以外で数値が上がっており、中でも項目 6、10 で大きく上昇している
- v. 項目 5～7 は 8 回目以降、高い水準を保ちながら類似した波形をしている

i. 項目 4、10 で授業開始時の数値が著しく低い

項目 4 は、具体的な教育活動の組み立て、項目 10 は学級運営についての質問である。このことから、学生は既に付属幼稚園見学実習、幼稚園実習、

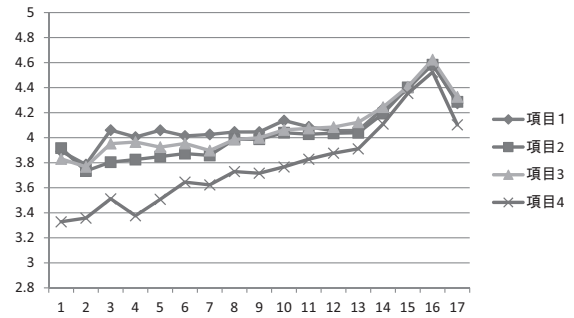


図 1：使命感や責任感、教育的愛情に関する事項

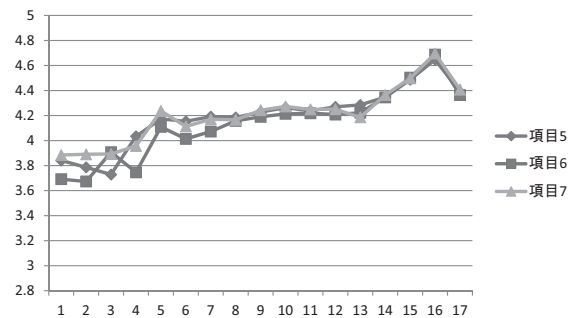


図 2：社会性や対人関係能力に関する事項

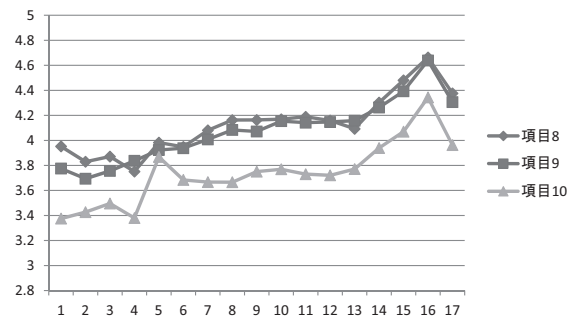


図 3：他者理解や学級経営に関する事項

保育所実習 I、保育所実習 II の実習を終えているものの、なお具体的な教育活動を組み立てることや学級運営に対して自信を持っていない学生が多くいることが明らかとなり、本授業で取り組まなければならない重要な課題の一つであることが示唆される。

ii. 14～16 回目はすべての項目で大きく数値が上がっている

14～16 回目は、「幼児教育祭」の前日から当日にかけて 3 日間にあたる。「幼児教育祭」は、本学幼児教育学科の伝統行事であり、毎年多くの地域の方々に来場をいただいている。本授業での位置づけは、授業の総まとめとしての成果発表の場である。14 回目は、劇発表のクラスは付属幼稚園を迎えるのリハーサル、巨大迷路・アトラクションのクラスは、今年度より学生同士で模擬保育を行った。

調査の結果、いずれの項目でも16回目に最高値を示していることから、実際に子どもたちを目の前にして授業成果の発表を行ったことで、ロールプレイで深めてきた学びが現実のものとなり、努力したことは子どもたちにも伝わるのが実感できたと考えられる。

iii. 3回目は項目5、7以外で数値が上がっている

3回目は学級経営を学ぶ目的で付属幼稚園見学を実施している。先行研究において、この見学が「自らが来春から保育者として働く姿を意識した上での見学となるため、時期と状況が有効に働く」²⁾こと、「教育課程、学級経営案、当日の指導案を資料として提示されることで、保育者が見通しを持って保育をしている様子を資料や子どもの様子から汲み取り、記録に反映させている。それらの意識は、(中略)“見通しをもった保育”を意識することに役立つ」³⁾として、長期指導計画と短期指導計画の繋がりを実感する機会となることが示唆されている。加えて、今年度は前述したように、第2回で作成する月の指導計画を見学時の11月で作成にすることで具体的な現場のイメージに結びつけることを試みた。調査の結果からは、他者理解や学級経営に関する事項だけではなく、使命感や責任感、教育的愛情、社会性や対人関係に関する事項も大きく数値が上昇したことが示唆された。

iv. 5回目は項目3以外で数値が上がっており、中でも項目6、10で大きく上昇している

5回目は「学級経営に基づいた発表計画に向けての話し合い」を実施した回であり、この話し合いは、まず各々で付属幼稚園見学で学んだ学級経営を自分のクラスに当てはめ、クラスの現状を把握し、課題を見つけることから始める。その後、クラスのリーダーを選出し、リーダーを中心に自分たちで立案した学級経営に基づいて発表計画を立てていくといった流れで行われる。いわば、前半の学びと後半のロールプレイによる実践的な学びを繋ぐ回である。調査の結果、項目3以外のすべての項目で数値が上がっていることから、この過程によって、学生が自分の所属する集団を再認識したと同時に、クラスの仲間と集団としての課題を共有したといえるのではないだろうか。

この回における上記のような方法は、平成26年度より実施しており、これは、昨年度の研究論文に、「平成23年の授業開始当初は、行事に向けての準備授業であるというこれまでの授業イメージが抜け

ず、授業前半での学びと後半のクラス活動の関係性が浸透しきれなかった。その点については、(中略)授業改善を積み重ねることで、授業全体の系統性も生まれ、学生の意識も変容している様子が見られるようになってきた」⁴⁾とある取り組みの一つである。しかし、未だこの取り組みの具体的な効果の検証には至っていない。したがって本研究では、この授業改善が、集団における協同学習の効果に大きく影響を及ぼしている可能性が窺われるとして、後述するクラス別の平均値の推移で更に考察を加える。

v. 項目5～7は8回目以降、高い水準を保ちながら類似した波形をしている

項目5～7は、社会性や対人関係に対する項目であり、8～13回はロールプレイによるクラス活動である。このことから、昨年度の研究結果と同様に、集団の中でロールプレイを繰り返すという協同学習では、常に学生が社会性や対人関係に対して高い意識を持っていることが明らかとなった。しかし、クラスごとで数値の変動に差異があるのか、項目間の関係性はあるのかなど、より詳細な分析が必要であるため、項目ごと、クラス別に平均値の推移で考察を深めたい。

2. 項目別、クラスごとの平均値の推移

ここまでの分析では、付属幼稚園見学、学級経営に基づいた発表計画の話し合い、授業の成果発表である幼児教育祭のリハーサルおよび当日に学生の学びが大きく深まることが示唆されたが、そこまでのプロセスやクラスごとの数値の変動差については明確になっていない。ここでは、項目ごと、クラス別に平均値の推移を調査し、分析する。また、7回目以降のクラス活動については、授業概要で示した場所別の活動内容も参照しながら考察を深める。

① 使命感や責任感、教育的愛情に関する事項

項目1 誠実かつ責任をもち、他者から学ぶ意識

この項目の特徴としては、3回目の付属幼稚園見学でいずれのクラスも大きく数値があがったことが挙げられる。要因としては、前述した時期や状況が有効に働いていることに加え、見学前に「学級経営を学ぶ」という目的を明確に学生に伝えていること、更に見学前に11月の月案を作成したことで自分が予想した子どもの姿と実際の子どもの姿との比較が可能になり、学生の子どもの姿から学ぼうとする姿勢が強まったのではないだろうか。

また、Dクラスで11、13回目の数値が大きく減

少している。この傾向は、項目2、3、6でも見られるため、他の項目との関連も含めて後述したい。

項目2 自発的・積極的に責任を果たす姿勢

この項目は、Bクラスで9回目、Dクラスで11回目と13回目で大きく数値が下がるものの、8回目以降、全体としての基準が上がっている。8回目は、場所別の活動内容によると、台本や配置案が決定された回であり、個々の学生が集団の一員としての自分の役割を具体的に把握し、活動し始めた回といえる。したがって、「自発的・積極的に自己の責任を果たそうとする」意識が高まったと推測できる。

また、Dクラスでの11、13回目の極端な数値の減少は項目1でも見られた。加えてBクラスも項目1で本項目と同様の9回目に数値の減少が見られ、両クラスは項目3、6でも同じ回に下降が見られる。両クラスはSKホール担当であったことから、この後活動場所別に分析を加えたい。

項目3 自己課題の発見、学び続ける姿勢

この項目は、質問項目に「自己研鑽」「学び続ける姿勢」とあるように、高い倫理観と規範意識を持つようとする姿勢が測られる。アンケートの数値は、3回目の付属幼稚園見学でいずれのクラスも上昇するが、その後は上昇と下降を繰り返しつつ停滞し、14回目以降に再び大きく上昇している。3回、14～16回は、付属幼稚園見学、付属幼稚園を迎えてのリハーサル、幼児教育祭当日といずれも実際の子どもたちと接する回となっている。このことから、実際に子どもたちを目の前にする事で、学生が保育者としての使命や責任を再認識し、自己課題の発見や学び続けようとする姿勢に繋がっているのではないだろうか。

項目4 具体的な教育活動の立案

この項目は、前述したように授業開始直後の数値が著しく低かった。しかし、波形は4回目に数値の減少が見られるものの、上昇と下降を繰り返しながら右肩上がりとなっており、16回目には、他の項目と同等の数値を示している。このことから、本授業を通して、学生の「具体的な教育活動を組み立てる」ことに対する自信が高まったことが示唆される。

特記すべき事項としては、後半のクラス活動において、劇発表をしたB、C、D、Eクラスの波形は大きく上昇と下降を繰り返しているのに対し、大体育室を担当したA、Gクラスの波形は、ほぼ一定に上昇をしている。大体育室は、迷路やアトラクション

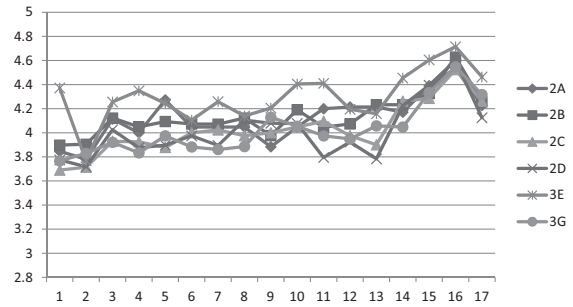


図4：項目1クラス別平均値の推移

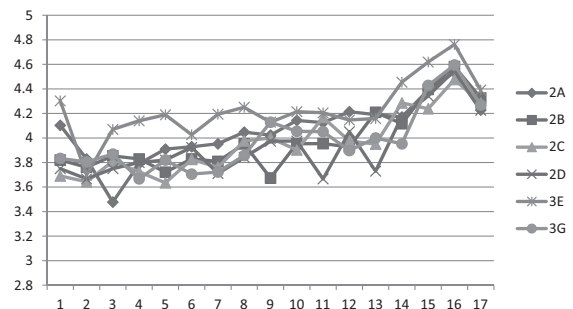


図5：項目2クラス別平均値の推移

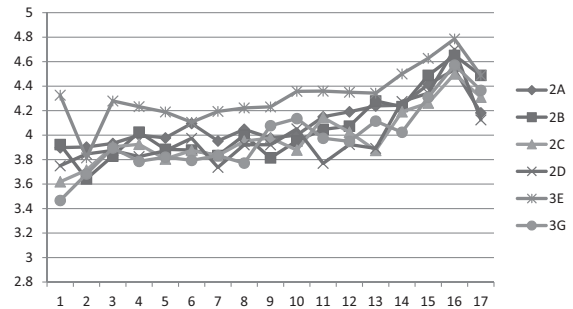


図6：項目3クラス別平均値の推移

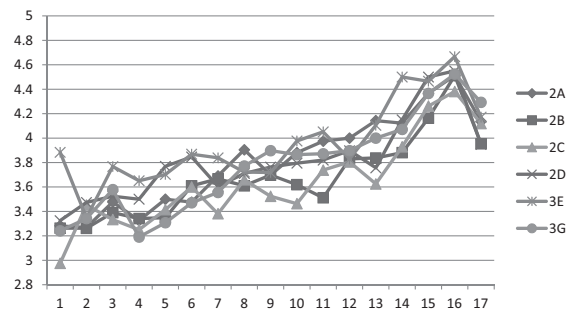


図7：項目4クラス別平均値の推移

の制作を中心とした活動であるため、常に子どもの発達段階や安全を意識して制作することが必要とされる。そのため、授業を重ねるにつれて、徐々に実際に遊ぶ子ども姿が具体的に予想できるようになるのではないだろうか。一方の劇発表のクラスは、舞台と客席で子どもとの距離が仕切られているため、子どもの成長や安全について考える事柄は少ない。

加えて、練習と制作の両方を行わなければならないため、授業ごとに活動の比重が異なる。したがって、毎時の数値に変動が見られたと考えられる。しかし、いずれの劇も子どもの参加型であり、参加の際の安全や発達段階の違いに対する配慮等を考える必要がある。フロア劇であるホワイエにおいては、舞台がないため、子どもの座る場所や入退場時における配慮も必要となる。担当したCクラスでの変動が非常に大きいことから、子どもの安全管理に苦慮した様子が窺える。とはいえ、いずれのクラスも実際に子どもたちに向けて行った14回～16回までの数値はすべてのクラスで大きく数値が上がっていることから、自らがこれまでの学びを生かしながら準備してきた環境で実際に子どもたちが遊ぶ様子を見たことが、学生の自信に繋がったことが示唆される。

また、Eクラスで15回目、幼児教育祭1日目の数値が下がっている。ここでの要因としては、付属幼稚園を迎えてのリハーサルにおける子どもの反応と幼児教育祭で保護者と一緒に訪れた子どもたちの反応に差があり、予想外の反応や出来事が起きたのではないかと推測されるが、2日目の16回目には最高値を記録していることから、学生たちがこの問題に的確に対応し、課題を乗り越えた様子を窺うことができる。

② 社会性や対人関係能力に関する事項

項目5 受容的な態度、自己の役割を果たす姿勢

この項目では、質問項目に「他者からの意見やアドバイスに耳を傾け」とある様に、他者に対する受容的な態度が測られる。数値は、4回目でいずれのクラスも大きく数値が上がっている。4回目は、見学実習で得た学びを踏まえて園長講話を聴き、見学時の振り返りを行う回である。前述した今年度からの改善によって、講話の内容についてもより具体的な保育の現場を思い描きやすく、「他者からの意見やアドバイスに耳を傾ける」姿勢が高まったことが推測できる。

もう1つの特徴として、6回目にAクラスとGクラスのみ、数値が大きく下がっている。6回目は幼児教育祭での発表場所のコンペであった。AクラスとGクラスはいずれも希望場所での発表がかなわなかったクラスであり、そのことが数値に大きく影響を及ぼしていると考えられる。また、Gクラスでは、9回目に大きな数値の上昇、14回目の大きな数値の減少が見られるが9回目の上昇については、項目9以外のすべての項目で見られ、14回目の減少については、項目3、6、9でも見られるため、理由につ

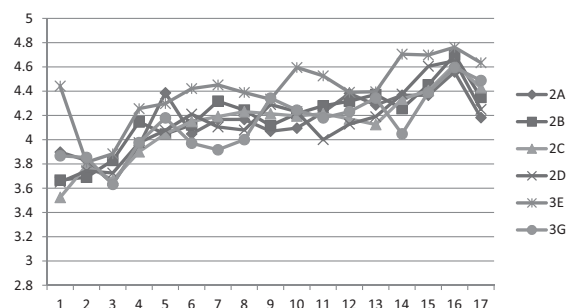


図8：項目5クラス別平均値の推移

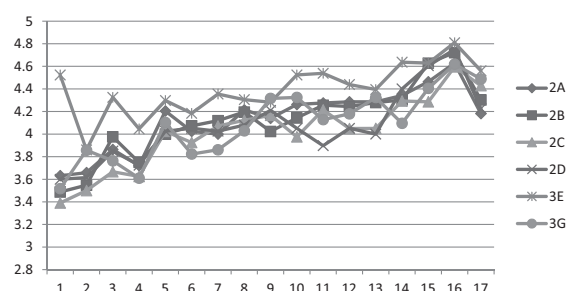


図9：項目6クラス別平均値の推移

いては後述したい。

項目6 協調性・柔軟性をもった活動

この項目もクラスごとで上昇、下降の差はあるものの、全体としては右肩上がりとなっている。このことから、学生が授業を通して徐々に集団の一員としての自覚と自らの立場を踏まえた活動を行おうとする姿勢が身についていった様子が窺える。

特記すべき事項としては、クラスによって多少の差異はあるものの、全体平均の推移と同様に、いずれのクラスも5回目に大きく上がっていることが挙げられる。このことから、自分のクラスを学級に見立てて経営案を作成し、それに基づいた発表計画を立てることが、学生の集団の一員としての認識が深め、協調性や柔軟性を持って活動にあたらうとする意識の深まりに大きく影響を及ぼしたことが示唆される。

一方で、6回目で大きく下がっている点については、自分のクラスの企画を通したいという思いから、他クラスの学生に対する協調性や柔軟性の意識が働きにくかったことが原因と推測される。今後はコンペを行う意味について学生に説明する等の改善が必要であろう。

項目7 連携・協力しながら課題に対処する力

この項目の特徴としては、5回目で大きく上昇するクラスが複数あったこと、7回目以降のクラス活

動ではGクラスで9回目に大きな上昇、CクラスとDクラスで13回目に大きな下降が見られる以外、数値に大きな変動が見られないことが挙げられる。

5回目で大きく上昇するクラスが多いことについては、先にも述べた、学級経営に関する改善が連携・協力しながら課題に対処する力の深まりにも効果的に働いたことが推測される。

9回目のGクラスの上昇については、Gクラスが担当した大体育室で全体の配置案が決定したことによると推測される。項目5で触れたように、この回はGクラスで項目9以外のすべての項目で数値が上がっていることから、学生の学びが配置案の決定によって大きく深まった様子が窺える。大体育室は、2クラスの合同発表となるため、互いの計画案を調整する必要がある。調整はあくまで互いの原案を活かすように行われるが、毎年リーダーを中心に苦慮している様子が見られる。しかし、その様な過程を通して経験した様々な思いや感情が学生の学びを深め、すべての項目で数値が上昇したといえるのではないだろうか。また、CクラスとDクラスの13回目の大きな下降については、同様の下降が項目1、2、3、4、8、9でも見られるため、後述する。

③ 幼児児童理解や学級経営に関する事項

項目8 親しみを持った態度

この項目では、「誰とでも」「親しみを持った態度」というキーワードから、他者に対して公平な態度で寄り添おうとする姿勢を測る。この項目もクラスによって波形が異なり、各回上がったり下がったりを繰り返しながら展開しているため、毎時の活動内容に大きく影響を受ける項目であることが窺われる。また、クラス活動であった7回目～13回目までの波形は、項目5～7の社会性や対人関係に対する事項と類似している。このことから、「誰とでも」「親しみを持った態度」というキーワードがクラスの仲間など、自分の所属している集団を意識した回答であったことが窺われる。一方で、14回目～16回目は、社会性や対人関係に対する事項とは異なり、Eクラス以外でほぼ同じ数値となっている。そこからは、「誰とでも」「親しみを持った態度」の対象が、集団の中から、幼児教育祭を訪れた子どもや保護者などまで広がった様子を読み取れる。

項目9 状況の理解、公平かつ受容的な態度

この項目は、他の項目に比べて最もクラスごとの差が少なく、2回目以降、多少の上下はあるものの、ほぼ右肩上がりとなっている。このことから、学生

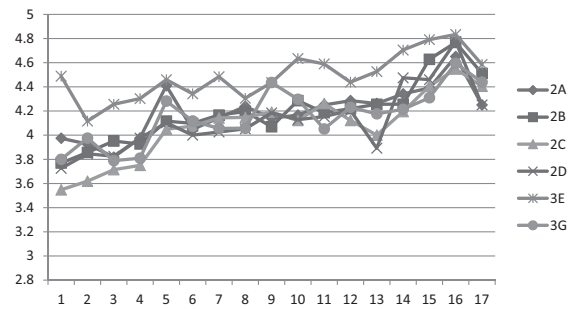


図10：項目7クラス別平均値の推移

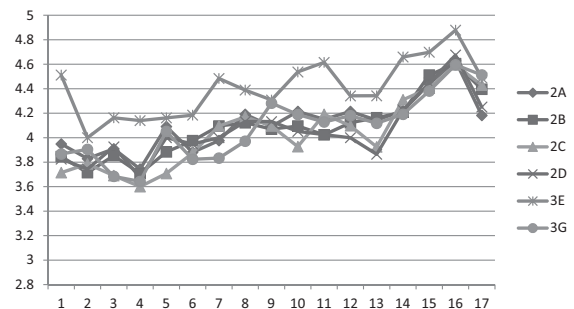


図11：項目8クラス別平均値の推移

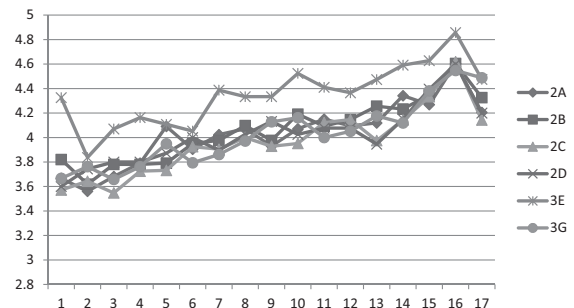


図12：項目9クラス別平均値の推移

が集団を意識した協同学習によって、徐々に集団内での自分の状況を掴みつつ、他者の気持ちを受け止めようとする意識が高まっていった様子が窺える。

特筆すべき点としては、Aクラスの15回目、幼児教育祭1日目で数値が下がっていることが挙げられる。Aクラスは迷路・アトラクションの担当であり、当日は不特定多数の来場者と常に接する事になる。子どもの姿や親子の関わり方も様々であり、加えて保護者への配慮も必要となるため「公平かつ受容的な態度」が機能しにくく、対応に苦慮の様子が窺える。しかし、2日目の16回目には大きく数値を伸ばしていることから、学生がこの課題を前向きに解決した事が読み取れると言えるだろう。

また、14回目にGクラスで見られる下降は項目3、5、6でも同様であった。14回目は、今年度より学生同士で模擬保育をしながら、全体像の確認、グループ間の調整や安全性の確認を行った。下降が見られ

る項目は、「学び続ける姿勢」「他者の意見やアドバイスに耳を傾ける」「自らの役割を果たす」「協調性や柔軟性を持って活動にあたる」であり、幼児教育祭前日で、残り時間が少ない上での意見にこれらの姿勢が機能しなかったことが推測される。

CクラスとDクラスで見られた項目1、2、3、4、7、8、9での下降は、同じく劇発表を行ったEクラスでも見られる。リハーサルや幼児教育祭を目の前にして責任感や使命感、社会性や対人関係に関する項目の多くが機能しなかったことが示唆され、次回には子どもの前で発表しなければならないという焦りや不安が感じられる。しかし、同じ劇発表でもBクラスではこのような下降は見られず、反対に上昇している項目が多い。担当教員の記録には、「よい通し練習が行えた」との記録が残っていることから、上記のような焦りではなく、成果が表れ始めた充実感と本番に対する意気込みの結果であると思われる。

項目10 学級の把握、経営案の作成

この項目は、前述したように、授業開始直後の数値が著しく低かった。しかし、この項目も5回目の学級経営に基づく発表計画の話し合いで大きく数値が上昇していることから、学級をクラスに置き換え、経営案に基づく活動計画を立てることを通して学生の学びが大きく深まっていった様子が読み取れる。

また、数値は6回目に大きく下降し、その後13回目までは上昇と下降を繰り返しながら停滞するものの、14回目以降に再び大きく上がっている。これは、クラスを学級に見立てた発表計画を立て、毎回の振り返りによってPDCAサイクルを繰り返しながら協同学習を行ってきたことが、幼児教育祭で実際の子どもたちを目の前にして現実のものとなり、学びの成果を実感できたためではないだろうか。

以上のことから、平成26年度より試みている授業の前半の学びと後半のクラス活動を繋げるために改善した実践方法は、学級経営に関する学びにおいて、大きく効果を発揮したと言えるだろう。

3. クラス別、全項目の平均値の推移

分析の結果の差が集団の性質、あるいはクラス活動の内容によるものであるのかを分析するために、クラス別に全10項目の平均値の推移を分析し、場所別の活動内容との関連も含めて考察を行う。

分析の結果、Eクラスを除いてクラスによって波形の違いはあるものの、上昇と下降、停滞を繰り返しながら重なり合うような形状で右肩上がりになっている。Eクラスも授業開始時の数値が他クラスよ

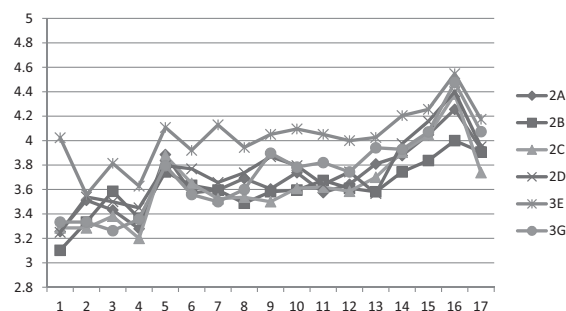


図13：項目10クラス別平均値の推移

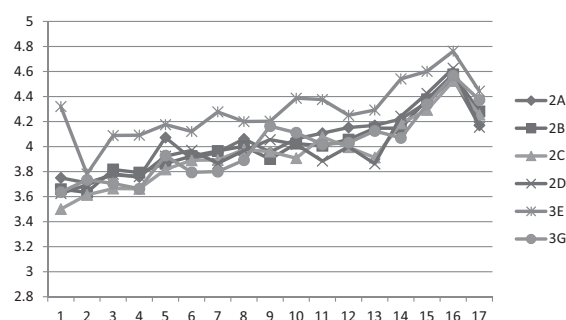


図14：全項目クラス別平均値の推移

り大きく高いことを除けば、全体的に高い数値ではあるものの、他クラスと同様に上昇と下降、停滞を繰り返しながら右肩上がりになっている。また、いずれのクラスも16回目に最高値を記録していることから、集団の中でロールプレイを繰り返しながら協同学習を行うことで、活動の内容の違いや集団内での出来事により、学びが深まった回に差異はあるものの、学生が集団の中で自己の立場を認識しながら、使命感や責任感、社会性や対人関係能力、他者理解や学級経営に関する学びを深めていく様子が窺える。

特記すべき点としては、前述した項目別クラスごとの分析で見られたように、いずれのクラスも数値が上昇した回と下降した回が、項目を跨いで共通していることが多い。場所別の活動内容と照らし合わせると、いずれのクラスも数値が上がったのは、台本や配置案の決定、中間発表や迷路の組み立て等、それまでの学びが成果として現れた回であり、下降が見られる回は、リーダーの交代や内容や台本の作り直しや修正、配役の変更など集団の中で大きな課題に直面している。しかし、いずれの下降もその後は、数値が大きく上昇していることから、学生がその課題を毎時の振り返りで受け止め、次の授業で改善しようと試みるといったPDCAサイクルを意識した活動が展開できていた結果とも言えるだろう。

4. 活動場所別、全項目の平均値の推移

クラス活動において、分析の結果が活動場所によって差があるのかを読み取るために、クラス活動であった7回～17回の結果を活動場所別に全10項目の平均値を求め、活動内容との関連も含めて分析を行った。

分析の結果、いずれの活動場所でも16回の幼児教育祭2日目に最高値を記録している。6212教室の数値が高いが、担当したEクラスは、1～6回目でも高いことから活動場所によるものではないと考える。

特筆すべき点としては、SKホール、ホワイエ、6212教室と劇発表を行ったクラスは波形が上下に大きく変動しながら上昇しているのに対し、大体育室を担当したクラスの波形は比較的穏やかに上昇している点である。しかし、いずれの活動場所でも、劇発表クラスは14回目のリハーサル以降、大体育室クラスは15回目の当日から大きく数値が上昇し、14～16回においてはほぼ同じ数値となっている。

ここまで述べてきたように、それぞれの活動場所には特徴があり、発表までのプロセスも子どもとの関わり方も異なる。発表場所を選ぶ際には、各場所の特徴を伝え、学級として成長できる場所を選ぶように指導しているが、いずれの活動場所でも、集団の中での活動内容や出来事が学生の内省に影響を与えつつ、そのような過程を通して経験した様々な体験や感情が学生の内省に深まりをもたらしていたことが示唆される。

V. まとめ

本研究では、協同学習の意義や効果を図るため、学生の内省（アンケート）から使命感や責任感、社会性や対人関係、学級経営に関する事項に対する深まりについて分析し、考察を加えた。その結果、全体平均の推移からは、付属幼稚園見学、学級経営に基づいた発表計画の話し合い、授業の成果発表である幼児教育祭のリハーサルおよび当日に学生の学びが大きく深まることが明らかとなった。

また、授業開始時には「教育活動を組み立てること」と「学級経営」に対して自信がない学生が多くいることや、付属幼稚園での見学時には多くの事項で学びを深めていること、集団でのロールプレイでは学生が常に社会性や対人関係に対して高い意識を持っていることが読み取れた。

上記を基にさらに詳細な分析、考察を試みた項目別、クラスごとの平均値の推移からは、以下の点が

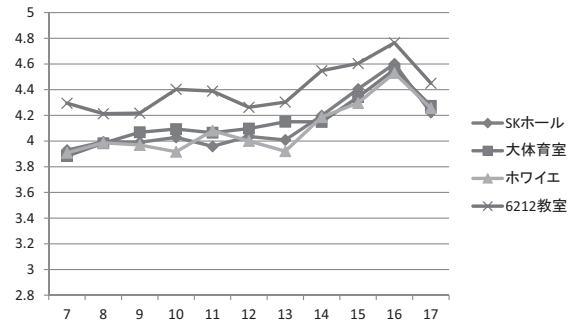


図 15: 全項目活動場所別平均値の推移

示唆された。

- ・事前に月の指導計画を作成したうえで付属幼稚園を見学し、園長講話を聴くことが、学生の子どもから学ぼうとする姿勢と受動的な態度を高めること（項目1、5）
- ・個々の学生が集団の一員として自分の役割を具体的に把握した時、自発的・積極的に責任を果たそうとする意識が高まること（項目2）
- ・実際に子どもたちを目の前にすることで、学生が保育者としての使命や責任を再認識し、自己課題の発見や学び続けようとする姿勢が深まること（項目3）
- ・これまでの学びを生かしながら準備してきた環境で、実際に子どもたちが遊ぶ様子を見ることが「具体的な教育活動を組み立てる」自信に繋がること（項目4）
- ・クラスを学級に置き換えて、学級経営案に基づいた発表計画を立てることが、学生の協調性や柔軟性の意識や連携・協力しながら課題に対処することへの意識を高め、学級経営に対する学びを大きく深めること（項目6、7、10）
- ・他者に対して公平な態度で寄り添おうとする姿勢が、幼児教育祭では自分の所属している集団だけではなく、子どもや保護者などまで広がること（項目8）
- ・授業の回数を重ねるにつれて、学生が徐々に集団内での自分の状況を掴みつつ、他者の気持ちを受け止めようとする意識が高まること（項目9）

クラス別の分析からは、集団の性質に関わらず、いずれのクラスでも学びが大きく深まったのは、それまでの学びが成果として現れた回であり、下降が見られる回は、集団の中で大きな課題に直面していたことが明らかとなった。また、そのような課題を毎時の振り返りによるPDCAサイクルを意識した活動によって乗り越えている様子が窺われ、毎時の

振り返りの重要性を再確認できた。

また、活動場所別の分析では、いずれの場所でも、集団の中での活動内容や出来事が学生の内省に影響を与えつつ、そのような過程を通して経験した様々な体験や感情が学生の内省に深まりをもたらしている様子が窺えた。

以上のことから、本研究では集団の中でロールプレイを繰り返すという協同学習によって、より実践を意識した活動が展開され、社会性や対人関係だけでなく、使命感や責任感、他者理解、学級経営についても、学びが深まっていったことが明らかになった。また、付属幼稚園での見学前に作成する月の指導計画を見学月に設定した授業改善と、「学級経営案に基づいた発表計画に向けての話し合い」における実践方法の改善についても、有効に働いていたことが示唆された。そして、今年度は毎授業後に行う担当教員間での打ち合わせ記録を基にクラスでの出来事を学生の内省を照らし合わせることで、より具体的に学生の学びがどのような場面で深まっているのかを読み取ることができた。担当教員による適切な指導、毎時の振り返りの重要性、そして、それらを支えるチーム・ティーチングを中心とした担当教員間の連携の必要性も再確認できたと考えている。

VI. 今後の展望

今年度の研究により、集団での学びによって教職実践演習の到達目標に含めることが必要とされている4つの事項のうち、①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童理解や学級経営に関する事項について、学生が学びを深めたと感じていることを明らかにすることができた。一方で④教科・保育内容等の指導能力に関する事項については未だ明らかになっていない。今後は、この事項についても学生がどのように意識し、本授業において学びを深めることができているのかについても研究を行い、より良い授業に向けた改善に努めたい。

また、この学びで学生が得た視点が保育の現場でどのように働くのか、またこのような学びの姿勢が継続されるのか、更なる継続研究も行っていきたいと考えている。

本研究に関する調査は、平成28年保育士養成協議会研究大会での発表を詳細に分析したものである。

謝辞

本論文執筆にあたり、授業運営において、鳥居恵治先生、鈴木文代先生、野田美樹先生（岡崎女子短期大学 幼児教育学科）にご協力をいただきましたこと深くお礼申し上げます。

付記

横田：第I章、第IV章第1～2節、第V～VI章

滝沢：第III章

山田：第IV章第3節

平尾：第IV章第4節

米窪：第II章

引用文献

- 1) 山田悠莉、滝沢ほだか、横田典子、平尾憲嗣、米窪洋介（2016）「『教職実践演習（幼稚園）』における協同学習の効果—集団での学びに焦点を当てて—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』（第49号）、pp.81—87
- 2) 山田悠莉、大岩みちの、鳥居恵治、赤羽根有里子、小野隆、米窪洋介、加藤早苗、野田美樹、平尾憲嗣、滝沢ほだか、横田典子（2014）「『教職実践演習（幼稚園）』の授業内容に関する研究—付属幼稚園の観察記録から見えるもの—」『学術総合研究所所報』（第7号）、pp.45—53
- 3) 2)に同じ。
- 4) 1)に同じ。

参考文献

- ・中村治人、大岩みちの（2013）「岡崎女子短期大学における教職実践演習（幼稚園）初年度実践報告—教職実践演習の実施に係る課題」『東海教師教育研究』（第27号）、pp.36—46
- ・文部科学省「教職実践演習（仮称）について」（2006）中央教育審議会
- ・平尾憲嗣、滝沢ほだか、山田悠莉、米窪洋介、横田典子、野田美樹、鳥居恵治、大岩みちの、赤羽根有里子、小野隆（2015）「教職実践演習（幼稚園）における意識調査の分析」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』（第48号）、pp.27—34